

今 考えていること

センター協力研究員（群馬県総合教育センター指導主事） 懸 川 武 史

年明けに平成に代わった年度から、面接室での出会いをとおしていろいろな事を学び始めました。その数年後のことです。“家族”というものにこだわり、いくつかのワークショップに参加しましたが、その中でも亀口先生の家族療法は創造的でとても新鮮でした。南青山のS会館で開催された先生のワークショップへ参加したことから、協力研究員としてここに座っているのだらうと思います。

集団が形成される初期には、構成員相互の共通点を見出していく姿がよくみられます。私にとって、学校臨床総合教育研究センターでの初回の自己紹介がそうでした。（今でもそうかもしれません。）出席されている方々の会話に、僅かでも何か共通することを探し続けていたように思います。

初回のときだったでしょうか、「エスノグラフィー」の言葉に、フィールドワークにおける仮説生成の体験を思い出しました。

直線的な仮説検証の流れにおけるプレ・ポストの時点で、相談・指導の有効性を捉えることに疑問を持ち続けていたときです。ある夏のフィールドで、Y助教授の人間関係のとり方、情報の集め方に興味を持ちました。フィールドワークとの出会いは、夕立があがったキャンプサイトの清々しさと共に始まりました。

フィールドワークでの参与観察の体験は、面接室で相手の話（物語）を聴くことと共通する点があるように思います。フィールドから網羅的に収集した情報をエスノグラフィーとして書く体験から、子どもの変容を円環的に捉えることに気づきました。カテゴリーの構築まではいきませんでした。仮説生成により“先に手法ありき”から「先に子どもありき」の相談・指導観を持って、子どもから何を教えられるのだらう、何が見えて来るのだらうという視点が理解できました。

今、手繰り寄せたイメージを整理して考えていることは、私達教師が問題を解決する際どのような思考過程を用いているかということです。あまりに原因・追究の直線的な捉えかたに偏りすぎているように思えます。学級で問題行動がみられたとき、または他から指摘（教師が問題行動に気づかなかった場合）されたときに原因を追究するけれど、対応に至らず他に責任や問題の所在を転化してしまうことはないでしょうか。

問題行動へ対応するには、相談・指導についての理解と体験をとおした指導力の修得が必要と考えます。ワークショップモデル（Plan・Do・See）のスパイラルな過程により、意図的に体験学習が実施され、円環的な思考に身を置くことが求められていると思います。

教師が体験学習及び子どもへの相談・指導をとおして、自己に気づき、理解を深め、自身を肯定的に受け入れる、相互成長モデルが教師の真の意識変革を促進すると考えます。

秋に訪れたカナダでは、Dr.コールらによる「ピア・サポート」にこのモデルをみることが出来ます。教師カウンセラーは、ピア・サポーター養成のピア・サポート・トレーニングにおいて、共有体験をとおして自己成長を共に目指しています。

この背景には、ピア・サポートが20余年前のアンケート調査結果の事実からスタートしている点にあると思います。直線的に原因を追究したのでなく、円環的に事実として理解し、その特徴を生かす立場から育成を考えたこと。そこに彼らの子どもから学ぶ教育観が示されているのではないでしょか。

何故なら、「ピア・サポートは、子ども達が相談相手に友達を求めることが最も多いという事実に基づいている。」と定義されているからです。